

昔々、ある所に、浦島太郎という貧しいけれど、もやさしく働きのもの、若い漁師が母と二人で暮らしていました。

ある日、太郎が浜を通りかかると、子供たちが小さな亀をつかまえていじめていました。かわいそうに思った太郎は、亀を放してやるように頼みましたが、子供たちは承知しませんので、持っていたお金で亀を買いとり、海に放してやりました。

それから二、三日たって、太郎が海に出て釣りをしていると、「浦島さん、浦島さん」と呼ぶ声がし、そこには、この前助けてやった亀がいました。

「この前は危ないところを助けていたんでありがとうございました。お礼に、あなたを龍宮城に連れていってあげましょう。どうぞ私の背中にお乗りください」と言いました。太郎はおどろき、母のことも心配だったのでためらいましたが、すばらしい世界だとうわさに聞いている龍宮城へ行ってみようという気持ちが強く、しばらくの間ならと亀の申し出をうけることにしました。そこで、太郎がすすめられるままに亀の背中にまたがると、亀は海に向かって泳ぎだし、あつという間に海の底の龍宮城に着きました。

そこは今までに見たこともないようなすばらしいところで、立派な門のある大きな宮殿が立っていました。太郎は、その宮殿の奥に案内され、乙姫さまに会いました。乙姫さまは、「先日は亀を助けてくれてありがとう。何日でもゆつくり遊んでいってください」と言いました。そして、今まで食べたことのないおいしい食べ物や飲み物をごちそうになり、タイやヒラメの舞いや踊りを見せてもらったり、すばらしい龍宮城を見物したりして夢のような日々を過ごしました。

そういう生活が何日か過ぎて、太郎は、ごちそうや踊りにすこし飽きるとともに、地上に残してきた母のことが心配になって帰りたくなり、乙姫さまにおいとまごいをすると、乙姫さまは、「それはおなごりおいしいことですが仕方ありません。それではこの玉手箱をさしあげます。この箱は、どんなことがあっても開けてはいけませんよ」と言いました。

どうしてよいかわからなくなった太郎はぼんやりと海岸に座っていましたが、乙姫さまからもらった玉手箱に気づき、「これを開けたらもとの世界にもどれるかもしれない」と思い、乙姫さまとの約束も忘れて、玉手箱のふたを開けました。

すると箱の中から白い煙がぱっと立ちのぼったかと思うと、太郎はたちまち白髪のおじいさんになってしまいましたとき。おしまい。

浦島は玉手箱をもらい、また亀の背中に乗って、みんなに見送られて帰りました。またたぐ間に故郷の浜に着きました。亀と別れて村にもどってみると、なんだか様子が違います。自分の家のあった所には何もなくて、草がぼうぼうと生えているだけです。母のことが心配で、あちこち探してみましたが、どこにもいません。会った人に尋ねても、誰も母のことも太郎のことも知りません。